



<b>Data</b>	2026-8
監督・脚本：王童（ワン・トン）	
出演：陶述・陶姑媽（タオ・シュー）	
／石雋（シー・チュン）／王	
瑁（ワン・シュエン）／魯直	
（ルー・ジー）／趙正平（チ	
ャオ・チェンピン）／張世（チ	
ヤン・シー）／林揚（リン・	
ヤン）／文英（ウェン・イン）	
／劉若英（レネ・リウ）／金	
勤（キング・チン）	

## 👁️👁️ みどころ

「台湾近代史三部作」で有名な、王童（ワン・トン）監督の自叙伝的作品たる本作が、「台湾巨匠傑作選 2025」で日本初公開！日本敗戦後の「国共内戦」に敗れた国民党は、1949年台湾に大移動（逃亡）。その中には王仲廉總司令の第六子たる、幼き日の王童監督も！

陶工柿右衛門は夕陽に映える柿の実を見て、赤い柿の実の美しさにこだわり赤絵磁器を作ったが、中国の画家・齊白石が描いた名画「赤い柿」は如何にして大陸から台湾へ？

侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督の『悲情城市』（89年）は、台湾の近代史を描いた名作中の名作だが、本作は同じ台湾の近代史の中で、おばあちゃん（姪姪）を核とする王一家の人生模様を淡々と描くもの。両作品の視点は異質だが、両者を比較対照すればより興味深いこと間違いなし。2026年の今やっと日本初公開された本作を鑑賞できた幸せに感謝！

## ■□■「台湾巨匠傑作選 2025」で王童監督の本作を！■□■

私は「シネ・ヌーヴォ」で2024年10/5から10/25まで開催された「台湾巨匠傑作選 2024」で、王童（ワン・トン）監督の「台湾近代史三部作」の一つである『無言の丘』（92年）を鑑賞した（『シネマ 56』170頁）。

それに続いて下記のとおり、「シネ・ヌーヴォ」で2026年2/7から2/20まで開催された「台湾巨匠傑作選 2025年」で、私は王童監督の「台湾近代史三部作」の一つである『バナナパラダイス』（89年）を鑑賞したが、それと同時に彼の自叙伝的作品であり、同監督の代表作として有名な『赤い柿』を鑑賞した。

## 上映スケジュール

(各回完全入替制)

2/7 土	10:30 狼が羊に恋をするとき (シネ・ヌーヴォX)	14:05 赤い柿	17:15 村と爆弾	19:15 バナナパラダイス
2/8 日		15:15 赤い柿	18:25 無言の丘	—
2/9 月		14:25 赤い柿	17:35 バナナパラダイス	20:25 村と爆弾
2/10 火		16:15 赤い柿	19:20 無言の丘	—
2/11 水		10:00 村と爆弾	12:00 赤い柿	15:10 バナナパラダイス
2/12 木		10:00 赤い柿	13:10 無言の丘	—
2/13 金		10:00 童年往事	12:40 赤い柿	—
2/14 土	15:05 狼が羊に恋をするとき (シネ・ヌーヴォX)	20:40 台北ストーリー		
2/15 日		20:40 恋恋風塵		
2/16 月		—		
2/17 火		20:40 風が踊る		
2/18 水		18:10 赤い柿		
2/19 木		17:50 赤い柿		
2/20 金		17:55 赤い柿		

### ■□■本作のストーリーは？■□■

パンフレットやネット情報によると、本作のストーリーは次のとおりだ。

1949年中国河南省。国民党軍の王將軍一家が慌ただしく旅支度を整えている。国共内戦に敗れ一時的に台湾へ逃れるためだ。一家はおばあちゃんとお母さんを筆頭に大勢の子供たちを連れて、將軍不在のまま副官らとともに家を出る。中庭の柿の木は枝いっぱい実がなっていた。上海港では台湾へ渡る大きな船が出向の準備を整えている。従者のひとりフーシュン(福順)は、おばあちゃんが大切にしている柿の絵を持ったまま乗り遅れてしまうのだった。

一家は軍の用意した台北郊外の広い日本家屋で暮らし始め、子供たちはすぐに台湾での日々に馴染んでいく。一家から遅れて負傷した王將軍も台湾へ。「大陸反抗」を掲げ大陸奪回の機会をうかがうも、やがて退役してしまう。家族を養うため、王將軍は慣れない商売や養鶏に手を出しては失敗を繰り返し、一家の暮しも次第に苦しくなっていく。そんなある日、上海港で生き別れになっていたフーシュンと再会。柿の絵もおばあちゃんのものに戻って来たのだった。やがて困窮した一家は故郷から持って来た美術品を売り払うことで、子供たちの学費をねん出しようとするが、そのほとんどが贗作であることが判明する。そんななか、鑑定士が目をつけたのがおばあちゃん部屋に飾られたあの柿の絵だった…。

たしかに、本作のストーリーを要約すれば上記のとおりだが、これだけでは本作の素晴らしさは伝わらないだろう。そこで、いくつかの私なりの視点から、本作の素晴らしさを紹介したい。

### ■□■1949年、王總司令一家は上海から台湾へ！■□■

私の誕生日は1949年1/26だが、本作冒頭は1949年に国共内戦で苦戦中の国民党の王仲廉總司令(石島/シー・チュン)が、一家揃って上海から台湾に移住する(逃げていく)姿が描かれる。それを観ながら私が思い出したのは、『ザ・クロッシング』(14年、15年)、『シネマ44』78頁、90頁)。同作は「中国のタイタニック」と呼ばれる「大平輪号」の沈没事故をテーマとし、①雷義方(レイ・イーファン)と周蘊芬(チョウ・ユンフェン)、②于真(ユイ・チェン)と佟大慶(トン・ターチン)、③嚴沢坤と志村雅子、という3組の男女の「運命のクロッシング」を描いたものだが、同作でも大平輪号に乗って上海から台湾に移動(脱出)する際の、大群衆が混乱する姿が描かれていた。

『ザ・クロッシング』で見たそんな姿と本作冒頭の姿を対比すると、王童監督の実の父親をモデルにした本作に見る、王仲廉總司令一家の上海から台湾への旅（脱出）がいかにか恵まれたもの（特権階級的なもの）であるかがよくわかる。もっとも、その混乱の中、王總司令の義理の母で、王童監督の祖母（姥姥）（陶述・陶姑媽／タオ・シュー）が大切にしている画家・齊白石の描いた絵、「赤い柿」を持った王家の従者、周福順（ジョー・フーシュー）（趙正平／チャオ・チェンピン）が、その混乱のために乗船できなかったことによって、本作ラストに“あるエピソード”が登場してくるので、本作冒頭の物語はしっかり把握しておきたい。

## ■□■王家は10人の子たくさん！台湾の住民は？■□■

日清・日露両戦争から太平洋戦争にかけての日本は、「産めよ増やせよ」の国策が顕著だった。また、1949年10/1に建国された新生中国では、「貧しさ故の子たくさん」の時代が続いた。しかし、今や日本の少子高齢化現象は深刻な社会問題になっているし、中国でも長く続いた「一人っ子政策」の廃止とその反動による少子高齢化が少しずつ社会問題化している。それに比べると、本作冒頭に見る王總司令一家は子供が10人もいるからすごい。その面倒をみているのは母親の郭（王瑁／ワン・シュエン）と祖母・姥姥（陶述・陶姑媽／タオ・シュー）だが、軍務が忙しいためほとんど家にいない父親・王總司令に代わって副官の馮（フォン）（張世／チャン・シー）と料理人の老楊（ラオヤン）（魯直／ルー・ジー）も大奮闘！

台湾の近代史では、『セデック・バレ』（13年）に描かれたような日本人 VS 原住民（セデック族）の対立が顕著だったが、国共内戦の中で大陸から台湾（島）に移ってきた（逃げてきた）外省人が増えてくると、外省人 VS 内省人の対立も顕著になった。そのことは侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督の『非情城市』（89年）（『シネマ17』350頁）を観れば明らかだ。しかし、王童監督の自叙伝的作品にたる本作ではそのような生々しい対立や抗争劇は描かれず、將軍から平民に格下げされながらも、なお“特権階級”として広い庭付きの大きな日本家屋が王仲廉將軍一家に提供されるので、それに注目！

もっとも、彼の將軍としての収入は絶たれていたため、王一家の家計は大変らしい。そのため、小学校へ通う6名（？）の子供たちのすずりは全員の共用だし、妻の郭は鶏を飼って卵を売ることでは計の足しにしていたほどだ。さらに、蒋介石總統の命令下、王仲廉將軍は大陸への侵攻に向けて軍幹部たちと相談を重ね、出征もしていたが、本作ではその真相が明かされることはない。逆に、本作では將軍を引退した王仲廉がちよっとした商売に手を出したりしていたが、果たしてその成否は？

## ■□■子供たちが成長すると？劉自然事件とは？■□■

1989年に大陸から台湾に渡る船に乗った時、王仲廉一家の子供たち10人は幼かった。しかし、台湾での日常生活が続く中、王仲廉一家には11番目の子供が生まれた上、10人の子供たちがそれぞれ成長していったのは当然だ。そんな中、王童監督の自叙伝たる本作に突然、劉自然事件（=524事件）が登場してくるのでビックリ！1957年5/24に起きた劉自然事件（=524事件）は次のとおりだ。

- 1957年3月20日夜、中華民国陸軍将校の劉自然（1924-1957）が、友人の披露宴に出席し帰宅途中、台北の在台北米軍宿舎附近で、アメリカ陸軍二等軍曹 ロバート・G・レイノルズによって射殺されるという事件が発生。
- ロバート・G・レイノルズは拘束されたものの、アメリカは外交特権を使い、彼が士林地方法院檢察署に移送されるのを阻止し、アメリカ軍軍事法廷で審理。
- 自己防衛だったというロバート・G・レイノルズの主張は、捜査結果と矛盾していたが、軍事法廷は5月23日に誤射の罪は成立しないと、無罪で彼を釈放。
- 翌5月24日、劉自然の妻 奧特華が悲痛な思いを<聯合報>に投稿し、事件は人々の知るところに。
- 同日午前10時、奧特華は英語と中国語で書かれたプレートを携えアメリカ大使館前で抗議。
- 昼頃、現場に取材に来た記者に涙ながらに訴える奧特華の様子が報道された上、レイノルズが飛行機で逃げたという噂が流れたことで、怒れる市民が大使館を取り囲むようにみるみる増加。
- 人々は「打倒帝国主義」を叫び、一部の人が壁を乗り越えたのを機に、大勢が大使館内に乱入し、車や家具の破壊、大使館員への殴打と暴動に発展。

さらにビックリするのは、成長した王一家の息子2人がどうやらこの事件に関与しているらしいこと。そのため、王仲廉は一睡もせず、夜通し庭に立って2人の息子が戻ってくるのを待っていたようだが、さてその結末は？劉自然事件（=524事件）は台湾にとっては珍しい「反米闘争」だが、日本の「安保反対闘争」のような広がりを持たなかったらしい。とりわけ、本作では、おばあちゃんが戻ってきた2人の息子に麵を食べさせながら優しく迎える姿が印象的だ。

## ■台湾での日本映画の人気は？■

松山市の湊町2丁目という中心部で生まれ育った私は、小学生低学年の頃、両親に連れられて家の近く（徒歩5分）にある東映の映画館に何回か行ったことをよく覚えている。愛光中学に入学した後の、一人での3本立て55円の映画館通いは私の自主的な判断と行動によるものだったが、小学生低学年当時の東映の映画館行きは自分の意思ではなかった。当時私が東映の映画館で観た映画は、中村錦之助と東千代之介の『曾我兄弟 富士の夜襲』（56年）、大川橋蔵の『新吾十番勝負』（59～64年）、美空ひばりの「お姫様もの」等々だったことは今でもかすかに覚えているが、ハッキリ言ってそんなに面白いものではなかったため、「早く帰りたい」とグズっていたこともよく覚えている。

そんな私にとって、王一家の子供たちがおばあちゃんにねだって、夜の部で上映される映画館に共に赴く姿は興味深い。さらに興味深いのは、台湾の映画館で王一家の子供たちがおばあちゃんと共に観る映画が『宮本武蔵』や日中合作映画『海棠紅』（55年）であることだ。ちなみに私は、吉川英二の原作を東映が内田吐夢監督、中村錦之助主演で映画化した全5巻の『宮本武蔵』シリーズ（61年～65年）を全巻鑑賞済みだし、原作も中学生の時に全て読破している。しかし台湾で上映されている本作の『宮本武蔵』はそれではなく、三船敏郎主演の1954年版だ。

他方、王一家では圧倒的に男の子の数が多く、本作のラスト近くには成長した女の子、王光慧（劉若英／レネ・リウ）が教師として就職する姿と、彼女がおばあちゃんにピカピカの時計をプレゼントする姿が登場するので、そんな微笑ましい王一家の家族風景にも注目！また、本作ラストは王童監督特有の（？）集団劇＝お葬式のシーンになるので、それにも注目！

## ■□■王童監督は何番目の子供？美術の才能は母親から？■□■

柿といえば、日本では正岡子規の俳句「柿食えば、鐘が鳴るなり法隆寺」が有名。また夕陽に映える柿の実を見て初代酒井田柿右衛門が赤絵磁器を作ったとする逸話を、私は小学生の頃に『陶工柿右衛門』で読んだことを今でもはっきり覚えている。初代柿右衛門は、赤い柿の実の美しさに一生懸命にこだわったわけだ。ところが、私は本作のタイトルとされている「赤い柿」の由来となっている中国の画家・齊白石による「赤い柿」のことを全く知らなかった。その由来や価値については各自しっかり調べてもらいたいが、本作では冒頭とラストに登場する「赤い柿」の絵を持った周福順の物語に注目！そして、「赤い柿」というタイトルらしく、齊白石の名画「赤い柿」をモチーフとしながら激動する台湾の戦後史の中で、淡々と描かれた王童監督の自叙伝の結末の素晴らしさに拍手！

他方、本作ラスト近くでは、金策のために王仲廉・郭夫妻がやむなく所蔵の絵画一式を売却しようとする風景が登場するが、これら一式の絵画は王仲廉のものではなく、妻・郭のものらしい。つまり、王家の父親は軍人だが、妻・郭が美術畑の出身だったため、その母方から美術の才能を引き継いだ第6子の王童が成長後その方面に進み、映画監督に行き着いたわけだ。したがって、王童監督の自叙伝たる本作では、ところどころに淡々とそんなストーリーも登場してくるので、それにも注目。

なお、「台湾巨匠傑作選 2025」のパンフレットには「ワン・トン・（王童）監督インタビュー」と、ゲスト：村山匡一郎（映画評論家）、聞き手：リム・カーワイ（映画監督、台湾映画上映会キュレーター）による『「赤い柿」アフタートーク』が収録されているので、これは必読！



2026（令和8）年2月16日記